

親切の咲き誇る町

熊本県 熊本大学教育学部附属中学校 一年

甲斐 宗汰郎

「夏休み中だけん、父ちゃんと『みちづくり』の手伝いにきなっせ。」

田舎に暮らす祖父から連絡があったのは、八月初めのことだった。みちづくりの意味がわからないまま、父と一緒に祖父の家へ向かった。昨年末に曾祖母が亡くなり、今年は初盆で迎えることになる。

祖父の家に着くと、軽トラックと草刈り機や鎌がすでに準備されていた。さっそく軽トラックに乗り、曾祖母たちの眠る墓地へ向かった。みんなが墓参りをしやすいように、墓地一帯の草刈りを行うという。

「名字の違う方のお墓のところは、勝手にしない方がいいんじゃない？」と祖父に尋ねると、

「この地域の人たちは、じいちゃんより歳が上の人ばかりだけん、俺たちできれいにして、みんながお参りしやすくすると仏さんも喜ばすぞ。」

と話してくれた。この祖父の言葉で、「一人はみんなのために、みんなは一人のために、という名言を思い出した。

墓地の作業が終わり、昼過ぎからは農道や町道の草刈りを行った。草が生い茂ると、車や歩行者の妨げとなり、見通しが悪く危険であるため、今日のように気づいた人が主体的に行うだけでなく、町内の人々が協力して行うこともあるそうだ。帰省された人たちが清々しい気持ちで墓参りをし、田舎の自然や故郷に癒されることは、地域の見えない思いやりで支えられていることを知るいい機会となった。

こうした田舎の支え合いは、自らが相手のことを思いやり、できる範囲で自発的に行う祖先から受け継がれ、生活に根付いている精神の一つだと思う。この地で暮らすお年寄りが長寿で元気ハツラツとしておられる秘訣なのかもしれない。

親切というものは、一人の相手を思いやることから始まるものや、祖父の町の人々のように、地域の人々の暮らしの快適、安全を見えない側面から支えるものなど、幅広く存在する。みちづくりの手伝いのときに思い出した名言は、「一人がみんなのことを思う心で行動できれば、みんなもまた違った形で一人のことを思いやる行動ができる」と教えてくれた。この温かい心構えで生活ができれば、アフターコロナの現代社会にコロナ禍で大きく薄れてしまった、面と向かっての助け合い、支え合いが与える優しい輪が大きくなって戻ってくるような気がする。

今回、みちづくりの手伝いは暑く、虫にも刺され大変だったが、祖父の、

「これでみんなば気持ちよく迎えられるけん、よかった。」

この言葉と笑顔で、私も大きな達成感があり幸せで嬉しい気持ちになった。この町は、見えない親切がたくさん咲き誇る町である。